

古却矢三娼

分六寸三
分二寸五

コ
テ

ヨ
ク

紙 表

分一寸三
分二寸四

コ
テ

ヨ
ク

梓文木

遊里雲談

合不德

加輕三妮

陶淵明菊壽帶青樓捨僧慧遠遊
南驛稱山陸子靜乘猪牙入油堀

コケイノサンシャウ
古契三娼

ジシヨ
自叙

ヲシテルナニハ
潮光や浪速

アシ
の葦は伊勢

ハミヲギヨシ
の濱荻。北

ハラ
廓にふると

コトバ
いふ言あれ

フカガハ
ば。河東に

てらすとい

ふ言あり。

トコロ
所かはれば

シナガハソダチ
南驛育の

ノリ。アサクサ
薄も。朝卿

コケイノサンシャウ
古契三娼自叙

ヲシテル
潮光や浪速
ハミヲギヨシ
の濱荻。北
ハラ
廓にふると

コトバ
いふ言あれ

フカガハ
ば。河東に

てらすとい

ふ言あり。

トコロ
所かはれば

シナガハソダチ
南驛育の

ノリ。アサクサ
薄も。朝卿

の名によぶ。
 さりやみつ
イロザトコトイ
 の女肆言
フウゾクヲノク
 風俗各
コト
 異にして。
ンジャウマタ
 人情亦異也。
ナカヨシ
 今中。吉。
シメ
 品の人ン物
 をこしらへ
 て。楚ソの人
 情をかたら
 しむ。これ
シ
 を知るもの

名よふをさるるに
イロザトコトイ
 女肆言風俗各異なり
ンジャウマタ
 人情亦異也。今中。吉。品。
シメ
 の人ン物
 人情をかたらしむ。これ
シ
 を知るもの

は。これを
 好むものに
 は如ず。こ
 れをこのむ
 者は。これ
 をたのしむ
 ものにはし
 はず。我未
 タノシマズ
 樂何ぞ竹
 ムラ ジャウ
 呂が上 膳
 を饗ひ。白
 テフヤ
 菜梅家が黄
 ナギクラ
 餌を喰ひ。

是の如く。これに
 好む。これをこのむ
 者は。これをたのしむ
 ものにはし
 ず。我未
 タケムラ
 何ぞ。此に
 シマラ
 白草梅家が黄
 ウナギ
 輿を喰ひ。
 大木氏の餌
 モナ
 餅の犬
 イナ

大木戸の餅ホ

鈍餅タモチの大イ

なることを

しらんや。

誠マコトにしかり。

こや古契コケイの

三シヤウ媚シヤウにあ

らで。こけ

の残笑サンシヤウとも

見たまへか

し。ときに

天明七ツや

のひどくめ

こゝろをあらうや。誠マコト子コあらう。

あや古契コケイの三媚シヤウ子コあらう

で。さげの残笑サンシヤウともあらう

や。やうきやう

天明七ツやのひどくめ

紙カミもあらうひらうの年トシ。

ん。紙花喰

ふひつじの

年。通人の

羽織長き春

の日。花川

戸羅月が別

業。松風

亭に毫をと

る。

作者

京傳誌印

通人の羽織長き春の
日。花川戸羅月が別
業。松風亭に毫をと
る。

作者

京傳誌



序

京傳きはめて三
ツの色町にあか
るく。今一冊子
を著す。是をひ
らけば。ゆふべ
けの晝寐^{ヒルネ}の良の
をほひとなり。
これをたゞめば
傾城^{ケイセイ}の酒あたゝ
むるあふぎとも
なれり。されど
大纏^{マトヒ}ふりにし代
より。竹ばしご
くだれる今も。
人の口に戸さし
なければ。何某^{ナニガシ}

序

京傳くさきさき三ツの色町
らうき。今一冊子と著^{アラハ}す。是と
あけむ。ゆふべの晝寐^{ヒルネ}の良
きもの。とめを傾城^{ケイセイ}
の酒あたゝむるあふぎとも
なれり。されど大纏^{マトヒ}ふりに
し代より。竹ばしごくだれる
今も。人の口に戸さしなれば
何某^{ナニガシ}

是をうれひざら
んや。我はな^{トビ}薦
町抱^{テウカン}の身のさち
なれ。もしあざ
とをならすぼん
くらあらば。腕
づくをもて是を
ふせがん。その
こゝろざしを。
此書の鼻のさき
にむすぶてふ。
ただだひのはし
にしかいふ。

山王町薦のも
のあふさか市
事 かふ峨

自書印

うれひざらんや。あふさか^{トビ}市
町抱^{テウカン}の
身のさちなれ。もしあざ
とをならすぼん
くらあらば。腕
づくをもて是を
ふせがん。その
こゝろざしを。
此書の鼻のさき
にむすぶてふ。
ただだひのはし
にしかいふ。

山王町薦のも

あふさか市

事 かふ峨



北方
有佳
人

新鄭江都ノ地青樓
美人多シ。珊瑚翡
翠ノ枕。錦綉鴛鴦
ノ茵。思ヲ武藏鎧
ニ懸ケ。情ヲ常陸
紳ニ繡ル。朝々雲
雨ノ契。夜々郎親
ヲ換フ。

鄭仁孝也李樓多美人
新羅國王孫也李樓多美人
新羅國王孫也李樓多美人



深川

晋謝安携妓遊
東土



品川

家交江南北岨心通
上下往来船



たろやんそんけい
つばあんなあけ
うゝゝあれと

北尾政演画

古契三娼

鐘ひとつうれぬ日はなし江戸の春。されば御江戸の繁榮を申は。大引の手赤の助言をするにひとしかるべし。誠に土一舛金一舛と申せば。塵塚を穿ても金のなる木の實生はあるぞかし。わきて遊里の全盛はいふもさらなり。大門の仕置場たえて。堤に飛びこふ堂も。刑鞭の朽たるなるかと思はれ。橋下の火の見櫓に。風見の烏おどろかず。馬を四ツ谷の新宿につなぎ。牛を高輪の南にはなつ。かゝる江戸にすみては。夕に笛をふいて朝に紫の衣を着し。きのふまで櫻餅あきないし番太郎も。けふは地主の花をさかするぞかし。通町のほかに横町あれば。横町の外に新道をひらき。八百八町は。深川本所の中にもかぞえたらす。町鑑にもれ。

江戸繪圖にかきつくしがたき。小路小路又すくなからず。稻荷新道に白虎湯の看板かけしは。所の名にめでし間違なるべく。下路新道と聞ては。焼路のはひなつかしく。樂屋新道を通りては。見たきものといへる清女のそのはを思ひあたる。藥師新道も壺のゑんによらば。朝鮮の弘慶子が住べく。不動新道に繩暖簾かけしは。ばくもの屋の門口ならん。猫屋新道に鯉ふし屋はなけれど。厩新道にみごと厩はあり。瓢箪新道に鰻屋はあれども。鯰のなきこそ残念なれ。觀世新道の童は。有難の影向やとうたひ。狩野新道の藏の壁に馬を画しは。勸學院の雀なるべし。かゝる名高き新道にもあらず。爰にきんご新道といへるは。金吾中納言の住給ひぬる古跡にもあらず。主馬の小金吾が所縁もなけれど。國ものゝ多くある故に。かく名づけしも尤ぞかし。人通りは常にたえず。らうのすげかゑ世帯のやにを通し。鏡ときは佛の日よかはるをかなしみ。祭文となふ山ぶしのこゝに哀をとどむれば。長々の浪人來りて。御子孫も御繁昌と祝す。ちやらつく雪踏のおとは。日なしかしの歩行ふり。駒下路の虛無僧は。藏のむだ書よりぬけ出たるかとあやまたる。川越極樂寺本堂建立。たがア。かし本屋の風呂敷包は。片々へかしぎ。鍋釜のかけのへな土入は。そばやのうどん箱なり。鶏は砂水に羽虫を拾ひ。日間のべん／＼艸は。犬の尿をつらぬひては。己とふるき軒のつりしのふ。やれたる竹すだれかけしゑんさきに。將基さしていたるが。お手にわた問へば。金銀二枚に墨のすりかけ一ツとこたえしは。歩のたらざるなり。勝手よりそばやのかつぎよびかけて。ぶつかけ二ツとあつらゆるに。女房が盛にし給へ

とすゝめしは。残りたるしやうゆを。ひや飯へかけてくはんのぞみなるべし。大屋どのゝ娘が寒禪に目を覺し。向ふの親父が看經にぬむけを催す。つねに日のめさへ見ぬ新道の住ひも。園生に植てかくれなき。くれなひとよばれて。きのふまで川竹をつとめしも。其身の果報とて。さる大盡にうけられ。けふはおのしの名をつけて。よしとあらためさせ。ゆく／＼は内の首尾と／＼えて。御新造さまともよばせん心ざしなれど。しばらく茲に園となりけるに。およしははや歩行ふりにも。八文字のくせをかくして。急に白地めかすれど。まだ里言葉の折ふし難も。おかしかりき。男女に小僧までつけおかれ。一日のわざとは。芝居咄と飼猫のせわやかるとのみ。はち植のまんりやうは愛せど。己が身をうけられし代金の事は。はやわすれ。浅草の梅ばりに人仕事し

て。その日をくらすは母。文づかひの間には。紋附持であるきし兄も。泥鰌がおとし米見つけし如く。一度にうかみ出。日なしの七口をかたみに残し。去年世をさりし親父まで。草葉のかげにかた肌ぬいで。絡のさしみ引寄で。茶碗酒あをる身とはなりぬ。日の本は姫氏國とやらんきけど。からもやまともとく女の世界の中にこそ。此園の向ふは。表に藍にて古文字書たる隙子を立。大山石尊の御札にならべて打たる宿札に。女中御かみゆひ仲と筆ぶとに記しは。もと深川下木場の川並。鳶の娘にて。おさなき時は。まさきの葉で拵たがい／＼を吹。雑草で嶋田わけこしらへて遊び。ぎし／＼なるあしだはいて。船虫のはふうどんやの汁つき持て。醬油買に行し身の。おやはらからのためとて。十七のとし新子となりて土橋へ出てより。あたまのうへは

日々にふえ。藍上田の光りも夜とあきらかなりて。呉服屋の屋敷通ひをつけのばせにさせ。新川の遊樂を宿あづけにさする程の全盛。其後じまへとなり仲町へ出てより。藝者衆とよばるゝも所の習ひ也。光陰は三間堂の通し矢よりも早く。はや中どしまといふもふるくなれば。又かしをかつて表櫓へ出。はを白くして新造と化てより。額に小じわができ。ば／＼とお仲とあだ名され。ば／＼とよばるれば。己がことゝて返事するも。うきつとめぞかし。ゑちご縮のめき／＼するにはあらねど。たゞかすりへのみまわりて。情なしといはれしも。さすがまきのそげにもあらぬかして。わぐらといふ所に下。三の何某とて。句拾ひしたり。うかしのはなつばりして渡世を送り。あだ名で幕の通つたる男と夫婦のやくそくして。去年の春より務をひき。此新道の

住ひ。昔は人に結せし身の。今は人の髪に憂世をむすぶ世渡り。九尺二間の借家に疊四疊敷て。のこりの二疊はうすべりにてくろめ。越張は三庄太夫の淨留理本にてはり。さる程に哀れ。かべ一重障は。丸竹のおつつけ格子。張物の戸板に隠て見えねど。相州箱根御薬湯。二度入廿四銅。四五度入四十八銅。一廻り六十四銅としるせし看板をかけ。四百四病のなをるしかけも。ひんの病は請合れず。信濃の一季奉公人相手にして夫婦暮し。亭主は金川在で名にふれた長屋門づくりの。太百姓の獨息子にて。蕉風の面白くなき誹諧も少しはやり。碁も下手といはるゝ程にはうちて。江戸の流行唱も。先此人がささへ聞出し。稻毛。厚木の。作左衛門天王丸の。五郎介。なぞは直下に見くだせし。かな川での通もの。女房お品は伊豆の大嶋の生れ。新嶋村といふ所に。

嶋薪あきなふ者の娘なりしが。何故にや十一のとしかな川の宿へ賣られ。いづみやといふうちへ抱られ。實の入ッたとうもろこしの毛みる様な髪をそつて坊主にされ。ひろ袖の布子にこんのたびはいて。ひせんかきながら小ぢよくつとめしも。いつしか爰のうちの通り名をついて。おしよくとなりしが。ふと今の亭主となじみてより。焼盤喰合ふ中となり。椀堂で取れたなまこのけて置て。おまする程の眞實。外心はなかりき。あるとし品川宿の夏坂屋の亭主。湯治の歸りがけ。此女郎に見所ありてより。相談極めて品川へのくらがえ。品川の水にみがきあげてから。掘だしものよろこび。野風。すし野。村芝がれつにならべて。名も袖うらとあらためられ。九曜の星の合印付らるゝ身となりければ。今の亭主ことさら此袖浦が事わすれ兼。神奈川より

馬で通ひ。鳥はものかわ馬のいなゝくに。そのわかれをおしみしがこうじてより。五百石の田地を質入して。出来秋の勘定合ねば。おやち今はたまりかね。庄屋宿老の耳へ入て勘當し。在所を追はらわれければ。袖浦も薩摩の何がし山のたれさんに。うけらるべき場所をはづして。まことをたて。其年のくれ年明けて。南はんばに海苔をとつて渡世する。伯父をおやぶんにして。此新道の借家も。今は袖うらのおく口したる住居なり。女郎ノじみたるはくせとて。むしやうにしわきものなれど。さすが座敷持のはてとて。せたいのくりまはしよく。風呂の薪にふすばりて。いつしか家のすみんもくろみ。棚のはしの蜘蛛も住家をかゆれば。夫婦もはや江戸なれてみゆれど。女房は故郷忘じがたきや。一ちばん塩二ばん塩とて。嶋干物の目利と。日和見る事の上手な

るもおかしかりき。貝寄の吹春の旦より。鰯雲の雨催す秋のゆふべまで。貧乏をつかけくらのみするぞ。やるせなきせたいなり。されば人のゆくえと水のながれ程。さだめなきはなく。こゝとさら川竹の身は。なくと笑とに。一とせをおくり。まつとわかるゝとに一日をすごして。いづこいかなる人に身をまかせんもしれず。たゞ出雲の衆議評にまかする事ぞかし。孝にうられ不孝にうけ出るも。ゑんのあるのが貧なるべし。此三人のふじん。所はかれど。おなじ川竹の末葉とて。合借家同士の心安さ。折ふしはうしとみし流の昔を。かたり合て暮ぬ。ころは卯月の半。心なしにはやとれなと。心有人のいひ置しも尤。圍れのおよしは。あまり樂すぎて一チ日を暮かね。近所のおさな子かりよせても。人みしりして。こはく丹後の藍綿に。小便を置土

産して歸れば。せんかたなく。岡兩にゆげのたつ手焙引よせて。富士のすそ野みるやうに灰をならしながら。旦那にねだるべき下。心。拾小袖の摸様の案じにせいをつかし。木地ろいろの用だんすに。たてかけし三絢とつて。めりやすへ人の末水のながれと身のゆくえ。禿だちから廊に住ば。たゞいつとなくあけくれて。屏くり出す品さだめ。けふはかねつけ袖とめの。もんだい／＼をかぞえてあかす里の花。との子待夜はひさしうて。首尾のなるよのみかさよ。ふかう成程なれそめ心。おもひに。おもむけに。そふもあんまりやう事がないぞへ。といふすえの文句は。旦那へきこえてもすしゑんとりよゆへ。口のうちにてうたひ居る折ふし。むかふの女かみゆお仲。きじまのあぶらでよれたる拾。かたは。お仲。モシお品さん。けふはうちでもるすだから。又はなそふじやアねへかね。トかべごしにいふ。となりのくすりゆんの付たぬの子のたすきはづして長らうのきせる。くはえぎせるに。して。たち出て。お品

ム、わつちも今ちつとはなそふと思て居たのよ。マアみねへ。此ながい目に。一チ日臺所もとにかゝつて居るわな。喰物こしらえほど。うるさいものはねへよノリ。お仲。せんでへおめへは奇麗すきだからよ。そしておしなどんが氣がきゝすぎて居ると。いふもんだから。おめへがてへノノじやアねへよ。モシおむかふのおよしさん。ちつとお咄なせへせんか。トお仲は三人のうちでのおしやべりゆき。かうしの所へたち出て。およし。わたしもけふは体屈して。身にもちあつかつておりいす。けふはさんをば梅堀へつかはしいしたから。小僧と久介ばかりさ。トふ所へ小僧たばこぼんへ。此子をご覧じいし。火を入でもちきたる。ゆふべねばけてながしへおちて。此様に疵をつけた。お仲。ヤア。あぶねへ。小僧どん。きのふの事を。いつつけまうそふか。小ぞうしたを出し。およし。けふはお休かへ。お仲。けさ。いつそしやく

がいたうござりやしたから。休みやし
た。おめへさんもおいゝなさへ
し。せんでへおめへさんには。しのぶ
が。しのぶとはかみのよくお似合なさへす
ふうの名ナリ。
[およ] みんながそふおつせへすが。
わたしはあつちにいゝす時から。手が
らが。これよりよはるの。すきさ。
[お品] お仲
さんは。よく廓の風をのみこんだよ。
品川なんぞじやアむすび兵庫がはやつ
たよ。まへどくら田のひめづるといつ
た女郎しゆが。すきでいつたつけ。
[お仲]
としまの風には。しの字わけ。こしか
け。京ぐる。なぞがいゝふうさ。深川で
まへどはやつた。天神むすび。まあとこ
本田は。きざな髪よ。
[およ] 稻城むす
びは。扇屋のおかねさんが。いゝはじ
めた風さ。
[お品] およしさんなぞは。品
川といふ所は。おしんなさるめへね。
[およ] そんじいせんよ。道中、双六で
見たばかりさ。それでも湯治から歸た

客人に聞いたが。氣色のいゝ處だ
とねへ。
[お品] 先高輪の茶屋からして。
新かどく。申かどく。一力。七力なぞ
と。他所にない家名がござりやす。
[およ] 石橋萬とやはら。留主居しゆの咄で
聞いた。
[お品] そして女郎しゆの名に。
三ッ字名の中に。おの字名がござりや
す。六七年跡はいゝ女郎衆がそろつて
ござりやした。さど屋つき出しのたい
そふであつたは。榮山さ。藏田で。ひ
な菊。りよ。松坂にはいゝ女郎が揃てを
りやした。柏屋で。なには。花まち。津
の國で。豊山。なをえ。藝者では。新内
で。鶴賀がはやりやした。河東は秀彌と
いふのひとりさ。哥に荻江物介といふ
が。ありやした。高輪には。壽樂さんが坐
本で。おどり子がだいぶござりやした。
義大夫で。春治と云がいゝ淨るりさ。
せんでへ宿のげいし者は高輪へゆかす。
高輪のげいしやは宿へ來ぬといふが法

さ。げいしやをよぶと新造がひとりづ
つきやす。男げいしやは。明朝生料
をとりにまわりやす。引ヶをとられる
もんだから。錢でうけとるのさ。それ
だからどんすやびらうどで。いきなさ
いふをこしらへて。自身にとりにまわ
りやす。人にとりにやつてもよさそう
なものだ。そうするとしきいらしい
なぞといつて。やかましい所さ。女郎も
今はうつりかはりやした。今では新松
坂の。此春。其君。佐渡屋で。町づる。あ
やぎぬ。村田で。その哥。ましてる。大松
坂で。其朝。野の芝。新叶で。三ッ花。鷺
瀧。ときわ屋。から哥。梅崎。なぞがき
ゝものさ。はやる女郎は。初くわいニう
らやくそくをさせやす。新造がふたり
付て昼夜さ。もの日もそふさ。わきと
ちがつて。若者の祝義も三ッくわい目
さ。そしてたれさま御仕廻誰と下々へ。
その女郎の名を書て。かげみせへは

やす。それを仕廻しかへれといふやす。みせをおもてみせといふやす。どこのもみな三人つゝさだまりで。みせへ出やす。それをみせばんと云やす。五ツにかはるのさ。此ことを正めんをはるともいひやす。みせばんでないものは。みな内うちみせにおりやす。お見たてといふと。みんなかげ見せへならびやす。よしはらは中なかつ座といつて。まん中に居るがいう女郎やうらうしゆだそうだが。品川しんがわじやア。兩方りやうほうのはしへすはるがいう女郎やうらうさ。見とうしの事を潰つぶといひやす。穴あなぐらの様に下タにある座敷ざしきを。下タ家といひやす。天王てんわうのじぶんがにぎやかさ。六月ろくがつの七日から十九日まで。ござりやす。そして燈籠とうろうが出やす。廿六夜は太もの日ひさ。妙國寺めうこくじの仁王にわうさん。岸かみ行寺ぎやうじのちうやなそは。べつしてにぎやかさ。惠美子ゑみこ構かまをはでにする所ところさ。大見せの若わイ者は。橋向はしもむかひへあそびに行いや

す。よしはらなら。川岸かわしへ行いくといふものさ。〔お仲〕つる吉といつた新内しんないのげい者は。どこに今はおりやすへ。〔お品〕やつぱり村田屋むらたやのむかふに居やす。モシそして旦那だんなやかみさんの居る所ところを。お部家べやと申やす。〔およし〕ヲよしはらじやア。ないしやうといひすよ。〔お品〕はかに客きやくのあるのをまわしといひやす。〔およし〕それもよしはらじやア。名代なぐしろのきやく人ひとといひすよ。〔お仲〕深川ふかがわなんぞじやアそんな手おもい事はねへが。よひとまりを付つきやくのくる間に。ぬすみといふをうりやす。〔お品〕ム、はてね。品川の法ほうでなじみのきやくが。ほかへかくれて行いのをしると。その先さきの女郎やうらうの所へ臺たいの物ものをおくりやす。〔およし〕よしはらじや。そふいふときは。つけとどけのふみと云をやりいすヨ。〔お仲〕深川ふかがわじやアなじみ茶屋ちやへかくし

ると。ぢきにその茶屋ちやから先へしらせやす。そふするとかわしなぞを。女おんなかうちの娘むすめがもつてくるのさ。そうすると跡あとがむつかしうござりやす。またいろ客きやくがあつて。子どもやから。茶屋ちやへあの客きやくへはだされぬぞといつてやかしといと。そのきやくが名なをかえて。外ほかのちや屋やであふ事ことがありやす。しれると大かぶりさ。〔お品〕品川しんがわはおとまりの有あるときがなんぎさ。今じやアほうんゝの亭主ていしゅたちが。茶ちやをすることがはやるそうさ。〔およし〕まへど美月みづきさんや萬千まんせんさん。賀達かたちさんなんぞが。くら前まへをおつき合あなんすじぶんは。よくよしはらへきなんしたよ。〔お品〕そのじぶんは品川しんがわも。さかりさ。〔お仲〕ふか川ふかがわじやア。かゝえをしてやるといふが。客きやくのはでさ。廊ろうでいはず新造しんぞうを出だすといふやうなものさ。そしてしかけや何なにかのさみしいことを。黄楊わうやうだのといふやす。是これは都

合あひのわるいとき。あたまのものもみんなまげてしまつて。つげの櫛くしをちよいとさしてゐたり。何かするから。それが通りになつて。つぶりのものでもわるいか。しかけがさみしいと。このごろはとんだつげさなどゝいひやす。きやくが茶屋のおんなに。まへだれなどを出しやす。しん子をだすにも。もん所もんじょや名をそめたまへだれをくばりやす。春子ども屋から抱かかにわたすしかけは。小袖二ツづゝさ。襦袢じゆばんを付てわたすうちもござりやす。そのあととみんなてんぐのきりやうさ。それだからはたらきのねへ子は。下帯したおびなんぞも下々のほうばかり三尺。新しいのをとりかえて。きざなことなんぞもするのさ。山びらきは三月廿一日から廿七日までさ。八まんさまのまつりは。八月の十四日十五日さ。十四日は舟まつりといつて。木場きはを舟で御輿みこしがわたりやす。それは

なせといふに。木場は橋はしがせまいから御輿みこしがとをらぬのさ。一ノ鳥居は代々木場からおさまりやす。まへど木場が槻家つきやと云まつりが出やした。わつちらが子どもの時分じぶんは。ゑびすのみやのこつちに。そばきり稻荷いなりといふがはやりやした。その時分じぶんはしばまがはつかふしやした。今はすさきのざるそばも名ばかりさ。ふち棚ななの石やき豆腐とうふは。お鷹おたかじやうと岡釣おかづりのたて場になりやした。いまじやア舂屋しゅうやがつかふさ。いまの惣介そうけいさんがりかうものさ。かみさんはおさち。むすめはおゑつといひやす。およし祝いわいあみさんはゐんきよしやしたかへ。一ト節ふしざりとやら云ふえをふきなんすネ。お仲おな士しばしのげいしやじやア。春吉。小吉。三喜藏。おみきなぞがうつたものさ。おとこげいしやでは。千蝶せんてつがふるいものさ。新次。五介。清二。喜六。なぞもとをつたも

のさ。ふた見やといふ子ども屋から。どれもいゝ子が出やす。およしひなまつとやらも。そこから出たじやアねへかね。お仲おな士しばしの子ども屋は。みんなゑきといふところをりをやす。仲町の梅うめむら。生松。山本。がいふしんに出来できやした。をり／＼よく家名いへなのかはる所さ。梅もとのていしゆは。あたま七といつていろしき。おもてやぐらにも地ぢがござりやしたつけ。今居る所もてまへの地めんさ。今で口きゝは。子ども屋のうちできま屋七右衛門。六十ッたんといふかし元。白舟の清七なんぞさ。仲町のはおりは。大きち八十吉。今きち。乙吉は廓くわくへいきやした。仲きち。だん子。ちんす。太夫で。八重太夫。三吉。伊八。千てう。長治。せん次。喜三。つる太夫。なんぞさ。およし磯八はよしはらへまいりやしたね。去年こぞのゑびすこう。長七いせ屋の筒

井さんの。きやく人のおもひ付で。介六を磯八がしいしたつけ。その時うちのむすめが。ほめことばをしいした。
[お仲] おもてやぐらへ出た路考かめが。はまむら屋はあかいものさ。さかい丁の安五郎が半四郎と。ひこべい。なんぞでやると。ごふてきさ。ひこべい。あいの事なり。こは。三ンやぐらでも。ば。おたきなンぞが。とをつたものさ。ふる石じやア今は豊倉がはやりやす。いゝ子どもがあるからさ。あすこはふせ玉さ。はやる子は四ッあけにいつちやアござりやせん。新石場じやア金子屋がにぎやかさ。げいしやは。奴嶋八。さみせんが文てふ。哥で五郎治。三味せんが宇八。はおりで。さよ吉。むめ吉。さ。佃四けんもまたできたそうさ。まへど仲丁へおくめといつて出た子が。やく年で廓へいつて。大かな屋とやらの。桑川とやらいひやしたが。およし

さん。しつてお出なるかへ。
[およし] その女郎しゆはたしか。二丁めの新見せのきつかう屋におひすよ。わつちもちつとよしはらの咄をしたふすが。ことし。総籬といふしやれ本に。書盡しひしたから。いふはむたでおすよ。このちう旦那もつてきておきいたから。よんで見いしたが。すつぱり松葉屋せかいさ。女郎衆のくせまでかきひした。
[お品] 品川で宿のうちへ出る。かごかきは横目をするがやくさ。かごかきいろ／＼ふてうがあるそふさ。またげん。正六。なんぞといふがありやす。
[およし] よしはらのかごやにも。ふてうがおすよ。茶屋なぞへいつてきいておひすに。ふりまし。おもたまし。みちまし。あぶれ。なぞといひす。五とくといふは。夜かごの三てふ並で。行とき云ふてうさ。
[お仲] きをつけてごらうじやし。深川通は吉原客と違つて。猪牙に

のりやうが迷ひやす。艦の方をむいて。逆様にのりやす。これは船頭と咄をするに勝手がいゝからさ。急ぐ時は二人船頭にするのさ。深川にも三十年程まへは。米蝶。べんてんおかん。木綿屋おきち。なぞと云名とりの床げいしやがあつて。そのじぶんはをしなべて。仲丁のことを。八まん丁といつたそふさ。ふるい深川通はしつて居る事さ。
[お品] お仲さん。もじ五郎はどふしたねへ。
[お仲] きつねが付てから死やした。深川じやアおとこげいしやがわり合で。八まん様へ護摩經あげやす。仲丁や土はしの子どもは。山からかよひ帳で喰物をとりよせるのさ。地めへの子どもは。十二もんめのうちを。茶屋へ六もんめとられて。子ども屋へ腰を。あどとはどう。三百二十四文とられやす。そして人をだました事を。とうがらしを。くはせてやつたと申やす。又ものゝ結着せぬ事

を。ふがきれねへといふやす。こいらは櫛のめきゝから出たことばさ。今じやア堤側や六軒でもいふそうさ。八まんの鐘は茶屋から。やくでかはりばんに。つきに出やす。【物品】品川でまつざか屋の野風といつた女郎しゆが。わかつたものさ。その時分芝に介といつて。けしからず手のあるきやくがあつて。その人の友だちが。まつざか屋へなじんで來やしたが。その介といふ人は。さのみいろおとこでもねへが。どこへいつて一坐しても。とかくひとりもてるそふさ。それだから折ふしは。高慢もいふそふさ。それを友だちがにくがつて。どうぞ一度たれぞにふらせて。此末かうまんのいはせぬやうに。してやりたいといふ咄を。野風が聞てゐて。わたしがところへつれてきなせへし。をもひれふつて見せやしやうと。ふと請合つたから。さいわいにして。二

三人ですゝめて。つれてきたのさ。先さかづきがひとをりすむと。そのきやくがつねへはげこだそうだが。どふ云氣か。茶わんできけをはじめて。野風にさしたのさ。野かせもかねてたくんで居る事だから。たべやせんといつたばかり。うけつけねへでてらしたのを。むりにしいるとつて。ついそのきやくが。銚子をひつくりかへして野風が着物へぐつつりさけをかけたのさ。きりたての八丈のむくもうちかけも。黒びらうどの帯も。さけだらけになつたが。さすが野風だから。へい氣ですつたつて。又きらびやかにきかえて來て。そふかふするうち。床もおさまつて。一坐のきやくは。いよ／＼こんにやは。とんだめにあふだらうと。となりのまわし坐敷に。聞てゐると。思の外野風が。大ばれにほれたやうすで。とんだもてるから。一さの客があつくなつ

て。野風をよび出して。約束がちがつたと。うらみをいつたのさ。野かせが云にやア。なるほどあの客人は。女郎かひに妙をえた。人でござりやす。おまへがたのさそひやうで。悟たかして。さつきざしきで。酒をわたしにかけたのは。そゝうのふりでした狂言でござりやす。それはなせと云に。こんやわたしに振れても。あの女郎はとんだけちな女郎だ。をれがそゝうでかけたから。その意趣にふつたのだ。酒をかけねへと。ふられやアしねへと。ぬけ句にするつもりでござりやす。わたしもまた。此宿では。まつざかのたれとをり名を付られたふしやうには。名がだいじだから。手だとしりながら。どふも今夜はふられやせん。それだから今夜はぐつとはれたかほで。うら約束をしてかへしやす。そふしてうらに來たと。き面白くふつて。みせやしやうと云たか

ら。みんな野風が發明はつめいを。かんしんしてそのあさはかへつたのさ。それからやくそくの日に。その介かいといふ客きやくのところに。その一座いざがいつて。けふはせひあゆびやれとすゝめたら。そのときその人のいふには。こんやうらに行いと。あの女郎ぢやうらうは。たしかにふるから行いまいと。見ぬいたやうにいつたとき。そのことを野かせが聞て。その手にほんとうにはれてきて。たび／＼文ぶんをやつてよびたがりやしたが。とんとその後はきやしなお仲んだ。お仲深川ふかがわに黒くろさんと云いきやくがあつたがね。とんだじやうなしで。そのくせお男おのこき。仇名あだなをびわえうとうと。能のうのめんとはいひやした。あんまり情じやうなしがとをつて。だれもとりとめて出たものがねへのさ。ふつとお鷹たかといふ子が。わつちがよんで見せやうといつて。黒くろさんに出たものさ。そふするとお蝶てふといふ子も。よんで見

せやうといつて出たのさ。それをおたかが聞て。ぐつと知らぬかほで。おてふにいふにやア。モシわつちや。おてふさんおめへと。兄弟きやうてい分ぶんになりたふごせへすと。いひ出したものさ。おてふがいふにやア。わつちやアどふもおめへと。兄弟きやうてい分ぶんになる。わけはごせへせんとはねたのさ。又おたかといふにやア。そのわけといふは。黒くろさんの事でごせへやす。ぬしはわたしがせんでごせへさんをかしてをくから。見事けんじによびとげねへ。そふするには兄弟きやうていふんのよしみがなくつちやア。かす事もならねへから。さつきのやうにいふのさ。お鷹たかもさる者ものだから。おてふをしばりにかけて。たか見けんて見物けんぶつをしやうといふ。悪あくしんさ。それからおてふは黒くろさんをよんで。いふにやア。おめへといふものア。わからねへものでごせへす。わ

つちやアおたかさんを。よびなつた事はしりやしねへが。どふもこふなつた日にやア。此こうへおたかさんをよびなつちやア。わつちが立たちやしねへから。おたかさんを切きれなせへしときめたのさ。黒くろさんがいふにやア。どふもてめへにやア。忠ちゆうといふきざがついて居るから。いやだといふから。なるほど忠ちゆうさんと云いきやくもごせへすさ。ごせへすがそれが氣きにくわざア。忠ちゆうさんを切きれやしやうといふうち。八幡はつぱんさんのをひだしがなるから。ぐつとせきこんで。なんでも朝あさなをしにして居なせへし。此こかたをつけて見せやしやうと。いつて。その忠ちゆうと云客きやくのところへ。手てがみをやつて。けふはなしてへ事がちつとあるからこいといつてやつたから。忠ちゆうがきたといふやつさ。それから忠ちゆうは。はおりを二三さんめへ。かつたり何かしてさわいで居ると。おてふが癪さかがいた

いとか。なんとかいつてたつたものだから。忠がぐつと疳癪で。これへなんのこつたへ。用があるのしまつてゐるのとよびによこしやアがつて。をいて。しやくがいてへの米がたけへのと。とんだ奴じやアねへかと云と。おてふはこゝがかみすりといふものだから。モシ忠さん。餘りてへそふな。こはいろをつけへなさんな。印纏沼じやアねへが。あとでうまるめへによと。つまみをいふ。忠はなを／＼あつくなつて。／＼そんならうまるめへとは。きれると云事か。これへわれとされたといつてな。他所いき煙管をもたねへほども。ふしやうじやアねへへと。いひつのつから。おてふはさいわいにして。つきだしてしまつたのさ。それが忠はいろおとこ。黒さんはぶおとこだ。おたかゞめへの。たてひきばつかりでそふしたのさ。それだから深川といふ

所は。客人のあすびに。でへぶあんばいのある所さ。いろ男にかえても金にかえても。子どもどうしのたてひきを。おもにする所さ。【初よし】よしはらでも。今はとをり名を付て。たいそうにして居る女郎衆が。みんな子どもさ。そしておしよくの女郎と。二まいめの女郎とは。どのうちでも中々のわるいものさ。今で繁昌なのは。ひなづるさん。きしやうのいゝのは。すがはらさん。まへど手をつた女郎衆は。松賀屋の。はつ嶋さんさ。いろきやくがくら前からまいりしたが。あるときくら前のきやくのやくそくのばんに。かねてためになるさ大盡の客がまいりしたのさ。くら前のほうへは心やすだてをして。その大盡をさしきへ入れたものさ。河東ふしなぞでしやれて居る所へ。藏前のがきて見た所が。約束だに。坐敷に客があるから。ぐつと大疳癪でさしきへふん込で。その大盡をさん／＼悪口したのさ。大じんもやくそくで居た事を。いはずにさしきへ入れられたものだから。まわしかたややり手やよんで。大騒動になりひしたが。はつ島さんはぐつとへい氣で。その大盡のまへゝいつて。モシとこんやはせてへくら前の客人の。やくそくでおひした。が。くるまでもまづさしきに。おきまうそふと思ひして。坐敷へ入レまふしひしたが。やくそくの事をいひしないのは。わつちが悪ふをした。ぬしもあの客人に。おつこうされなんしては。たちひすまいから。これでぬしの顔はたつておくなんしと。指をきりひしたのさ。そのひやうしに。ゆびがどこへかとおんで。見えなくなつたのさ。これでは氣がすみせんと。又左のゆびを。きらうとする所を。しんぞうやたいこもちがよつて。もふそれで心の中へは見

えやしたと。やう／＼とめひしたのさ。
それでその大盡も得心して。さかんに
なつてまいりしたが。それではくら
前のきやくが。腹をたつて來そうもな
いものだに。是もやつぱり。そのまへ
よりも結句しげ／＼に來ひして。それ
ほどのそふどふも。しづまつたのさ。
どつちかひとりはしくじるのだが。な

るほど手のある女郎しゆだ。大じんの
機嫌のなをつたは。きこえたが。くら前
のがよく黙つてくると。評判しひした。

あとできけば。ゆびを切たとき。なく
なつたふりで新造といひ合て。そのゆ
びをかくして。藏前のきやくの所へ。
もたせてやりひしたとさ。はつ嶋さん
がうけられていきなんす時。ぬしの口
からはじめて明してお咄なんした。そ
れでわかつたのさ。チャさんか。はやか
つたの。下女さん。たゞ今かへりました。

初世 ホンニもふあぶら屋がきた。もふ日

がくれるそふだ。初品 わたしどのう
ちでも。もふ歸るだらう。およながの
したくでもしやう。○女といへる
文字を三ッ書て。姦とよむもむべなる
かな。予ひとせ池魚のわざはひにあ
ひて。此新道にかり居せしとき。此三
人の物がたりヲきゝはべりしを。今そ
のまゝにこゝにしろしぬ。

作者 山東 京傳
閱同 けいこう

古契三娼大尾

へきぐすなくの
 べがねのきせ
 るは。はい吹
 をたゝいて。
 かんしやくの
 つけびやうし
 となり。おも
 ひにはどうし
 たはなのさく
 らばりも。く
 びをながくし
 て名代のきや
 くのごとし。
 合今はりわけ
 し三ッのさと。

きぐすなくのべがねのきせ
 るは。はい吹をたゝいて。
 かんしやくのつけびやうし
 となり。おもひにはどうし
 たはなのさくらばりも。く
 びをながくして名代のきや
 くのごとし。合今はりわけ
 し三ッのさと。

すいつけたば
 このすいなる
 も。あげぎせ
 るのやにこき
 も。とをると
 とをらざるた
 がひは。たど
 くわんぜより
 の一すぢに。
 たのむはほか
 にないぞへ。
 テツンシヤン
 きやら傳み
 づからばつ
 す。

れるも。あぶきやうれやむられも。と
 しゃうらうらぬむい。あやうんで
 うれーらぬ。ぬのむいほふれいそ
 テツンシヤン

まやう
 けうらうら
 ぐらうら
 五